



A TREASURY OF WORLD LITERATURE

世界の文学

36

リルケ

マルテの手記

神さまの話

ドゥイノの悲歌

オルフォイスへのソネット

オーギュスト・ロダン

若き詩人への手紙

若き女性への手紙

杉浦 博訳

手塚富雄訳

手塚富雄訳

生野幸吉訳

星野慎一訳

生野幸吉訳

神品芳夫訳

中央公論社

世界の文学 36

© 1964

リルケ

訳者 杉浦 博
手塚 富雄
生野 幸吉
星野 慎一
神品 芳夫

昭和39年9月1日初版印刷
昭和39年9月12日初版発行

価 390 円

発行者 宮本信太郎

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

マルテの手記

3

神さまの話

189

ドゥイノの悲歌

273

オルフォイスへのソネット

317

オーギュスト・ロダン

351

若き詩人への手紙

423

若き女性への手紙

459

年 解
譜 說

503 488

マルテの手記





九月十一日 トウリエ街にて

そう、そうなのか、ここへ人々がやつてくるのは、生きようがためのことなのか。僕はむしろ、ここでは何もかも死んでゆくと言いたいくらいだ。僕は外を歩いてきた。僕は見た——いくつもの病院を。僕はひとりの人間を見た。よろめき、倒れるところだった。人々がまわりをかこみ、僕はその余の事態を免れた。僕はまた孕んだ女を見た。陽にぬくもる高い塀にそって、重いからだをのろのろと運んでいた。ときどき手をのばして塀をさぐった。塀がまだそこにあるかと、確かめるように。たしかに、塀はまだそこにあった。そのなかは？僕は地図でさがした——産院。なるほど。身軽にしてはもらえよう——そのための場所だ。その先は、サンリジャーク街。ドームを被った大きな建物がある。地図に、ヴァルロッドグラス、陸軍病院とあった。

そんなことを知る必要はもととなかった、がまあどうでもいい。裏街に入ると、まわりから異臭が立ちはじめた。かぎ分けられるかぎりでは、ヨードフォームが、揚げじゃがいもの油が、不安が、におっていた。どんな街も夏にはにおうものだ。次に僕は妙に内障眼を思わせる一軒の家を見た。地図にはなかった。だが戸口の上にまだかなりはつきりと読みとれた——簡易宿泊所。入口のわきに料金表が出ていた。読んでみた。高くはなかった。そのほかには？ 置きっ放しの乳母車のなかの子ども——青くむくんで、額にむきだしのおできがかった。見たところ、治りきって痛んではいなかった。子どもは眠っていた。口をあけて、ヨードフォームを、揚げじゃがいものを、不安を、呼吸していた。どうしようがあったらう。肝腎なのは、生きることだった。それが肝腎なことだった。

窓をあけたまま眠るのを、やめることができないとは。電車が鐘をひびかせ、僕の部屋を轟然とつきぬける。自動車は僕を轢いて突っ走る。扉がひとつ、ばたんとしまる。どこかでガラスが落ちて砕ける。大きな破片は哄笑し、小さなかけらはくすくす笑う。と、突然、べつの方角から、にぶい押し殺した物音、家のなかだ。だれかが階段をのぼってくる。来る、どこまでものぼってくる。

来た、動かない、やっと通り過ぎる。と、また街路だ。むすめの金切り声がきしる——ネエ、ヤメテ、モウタクサンヨ。電車がたけり狂って突っこんでくる。その声を轢いて去る。何もかも轢いて走り去る。だれかが叫ぶ。人々が走る。足音が乱れる。犬が吠える。なんと気のやすまることだろう——犬がいるとは。明けがたには鶏さえ鳴く。これはかぎりない慰めだ。そしてふいに、僕は眠りに落ちる。

これはみな、物音だ。だがここには、もっと恐ろしいものがある——静寂だ。大火災のときに、よくこんな極度に緊張した瞬間があるものだ。ほとぼしる水がとたえ消防夫はもはや梯子にのぼらず、だれひとり身じろぎしない。音もなく、くろぐろとした軒の飾縁が迫り出す。舞い上がる炎を背に、高い扉がひっそりと傾く。人はみな立ちつくしたまま、肩をすくめ、目をつりあげて、恐ろしい打撃を待ちうける。ここの静寂の一瞬は、まさにそれだ。

僕は見ることを学んでいる。自分でもどういうせいかわからないが、すべてのものがこれまでになく深く僕のなかに入りこみ、いつもなら行きどまりになるところでとまらない。僕には自分でも知らなかった心の内部があ

るのだ。いっさいのものがいまそこをめぐり入りこむ。そこで何が起こっているのか、僕にはわからない。

僕は今日、手紙を書いた。そのとき思いあつたことだが、僕はまだここに來てほんの三週間にしかならないのだ。ほかの場所での、たとえばいなかでの三週間なら、まるで一日のように思えたこともある。ところがここでは、それは数年に値する。もう手紙も書くまい。自分が變わりつつあると、なんのために人に言わねばならないのか？ 變わりつつあるのなら、僕はもうかつての僕ではないはずだ。以前とは違った自分になっているのなら、僕にひとりの知人もいないことは明白だ。僕の知らない人々に、僕を知ってはいない人々に、手紙を書くことはできない。

もう言つたろうか？ 僕は見ることを学んでいる。そうだ、僕ははじめた。まだうまくゆかない。しかし、このことに、僕は僕の持つ時間を使いたいと思う。

たとえば、これまで気づかずにしたことだが、世の中にはなんとたくさん顔があるものか。たくさんの人々がいる。しかしそれよりもっと多くの顔がある。だれもがいくつもの顔を持つているからだ。何年もひとつ顔を持ち歩いている人々がある。むろん使い古され、うすよぐれ、皺が寄り、旅のあいだはめていた手袋のように、

伸びてしまふ。それはつましい單純な人々だ。顔を取りかえようとせず、洗濯に出そうともしない。これでけっこうさ、と彼らは言い張るだろうし、それでいけないと、だれに言えよう？ ただ、こういう疑問が当然残る。彼らとて、ほかにいくつか顔を持つているのなら、そのほかの顔はどうするのか？ しまつておくのだ。子どもたちにも被らせるつもりで。だが、彼らの飼ひ犬がその顔をつけて外を歩くことだつてあるかも知れない。なぜ、ないわけがあるろう？ 顔は顔なのだ。

ところが一方、氣味悪いくらいすばやく、つぎからつぎへと顔をとり換え、捨て去る人々もある。はじめのうちこそ換えはいくらでもあると思えるが、そのうち四十歳になるやならずで、もう最後の顔になつてしまふ。むろん、これにはこれなりの悲劇がある。彼らには顔を大事にする習慣がない。最後の顔も一週間ですり切れる。穴があき、あちこちが紙のように薄くなり、そのうちしだいに裏地が現われてくる。こうなつてはもう顔とは言えない。それでも彼らはそれをつけてろつき回るのである。だが、あの女ときたら。あの女、――女は自分のなかにすつかりのめりこみ、前かがみに、両手に顔をうずめていた。ノートルダム・デ・リッパン街の街角だつた。僕はその女を見ると、足音をしのばせて通り過ぎようとした。氣の毒な人たちがもの思ひに沈んでいるのを、邪

魔してはいけない。何かいいことを思いつかないでもないのだ。

しかしそこはあまりに人通りがなさすぎた。街路はがらんと退屈していて、僕の歩く下から足音をうばい、まるで木靴をうち鳴らすようにあちらこちらへ反響させた。女はぎくりとして、かがんでいた身をもぎはなした。ひどく急で、はげしい身振りだったので、顔が両手のなかに残ってしまった。そこに顔が、顔の凹んだ型が、ありありと残っているのを僕は見た。両手のくぼみにだけ眼を向けて、手に顔をもぎとられた頭の方は見ないでいることに、僕は言いようのない努力を要した。顔を裏側から見るのは不気味だった。しかし顔のない、むき出しの、傷口さながらの頭部は、もっともつと恐ろしかった。

僕は恐ろしくてたまらない。恐ろしいなら、なんとかその恐怖に立ち向かわなくてはならない。ここで病気になるでもしたら、どんなにみじめな気持だろうと思うのだ。だれかが気をきかせて、僕を市立病院に運びこむ、そんなことにでもなったら僕はきつとそこで死んでしまふだろう。この病院は設備のいい病院で、おそろしくはやっている。バリのカタドラルを正面から眺めようとしたら、出せるかぎりの速力で広場を横切り、ここに駆けつけてくるたぐさんの車のとれかに、あやうく轢かれか

ねない。鈴を鳴らしづめの小さな乗合馬車だが、そんな取るに足らない庶民でも、死に瀕して神のホテルという名のこの病院に一散に駆けこもうと思いつめたら最後、たとえサガン大公でさえ、自家用馬車を停めさせなくてはならないだろう。死にかけた人間は強情なものだ。マルティール街の古物商、ルグランのおかみふぜいでも、このシテ島の、とある広場に乗りつけてくるとなると、バリじゅうの交通が途絶してしまふ。ついでに言うが、これらいまわしい乗合馬車には、ひどく好奇心をそそる乳色のガラス窓がついている。その背後に、なんとも見事な苦悶図が想像されようというものだ。それには受付女が持つほどの空想力でことたりる。想像力がもつと豊かで、それをなおべつの方向に働かすことができる。あれやこれやの臆測は、まさにとめどなくなるだろう。僕はほかに、無蓋の辻馬車が到着するのを見た。幌を後ろにたたんだ時間ぎめの辻馬車で、規定の料金で走る――臨終の時間が二フランというわけだ。

このりっぱな病院は非常に古く、すでにクローヴィス王治世のころから、このいくつかのベッドで人が死んでいた。いまでは五百五十のベッドで死んでゆく。むろん工場でのようなあんばいだ。こんな大量生産では、ひとつひとつの死がそう念入りにつくられるわけではない。

しかし、そんなことは問題にもならない。問題は量なのだ。いまの世に、いったいだれが念入りに仕上げた死を高く買おう？ そんな人のいるわけがない。入念な死に方をしようと思えばできるはずの金持でさえ、投げやり、無関心になりはじめている。自分自身の死を持ちたいという願望は、ますます稀有になりつつある。いましばらくすれば、そういう死は、自分自身にふさわしい生と同様、ほとんど見当たらなくなってしまうだろう。そもそもなんでもが目の前に並んでいる世の中だ。生まれて来る。なんなりとひとつ生き方を見つける。できあいの生だ。それを身に羽織りさえすればいい。この世から去りたいと思う、もしくはそう強いられる。——いや、造作もないことだ。——ソコニアナタノ死ガゴザイマス、オ客サマ。成行きまかせに死んでゆく。病みついた病気の言うがままの死を死ぬわけだ（というのも、すべての病気という病気が判別されるようになって以来、さまざまた末期の締めくくりは病気がつけるのであって、人間自身の意のままになるものではない、ということになっているからだ。病人は、言うならば、何ひとつすることがないのだ）。

サナトリウムでは、患者たちはそれこそ唯々諾々と、医師や看護婦に大仰に感謝しさえして死んでゆくが、その実、そこでは施設備えつけの死のひとつを死ぬわけで、

それが見よいこととされているのだ。ところが自分の家で死ぬとなると、しぜん、作法にかなった上流階級の死を選ぶことになる。つまり、それと同時に第一級の埋葬や、それにつづく一連の華麗な儀式がすではじまったも同然の、あの死だ。そんなとき、貧しい人々はその家の前に立って、飽かず眺める。貧しい人たちの死は言うまでもなく平凡で、手数はいっさいかららない。からだにほぼ合う死が見つかれば満足だ。大きすぎてもかまわない、——人間はいつでもすこしは伸びるものだ。ただ、胸の前が合わなかったり、首が苦しかったりすれば、これは困るが。

いまはもうだれもない故郷の家に思いをはせるとき、昔はこうではなかったはずだと僕は思う。昔の人は知っていた（知らぬまでも感じていた）、ちょうど果実が果心を持つように、人はおのれのなかに死を持つのだ。子どもたちは小さい死を、大人たちは大きな死を、持っていた。女たちは胎のなかに、男たちは胸のなかに、自分の死というものを持っていた。そして、死を持つというそのことが、彼らに独特の威厳と静かな誇りを与えていた。

僕の祖父、老侍従ブリッケにも、彼がなおひとつの死をおのれのなかに宿していたことが見てとれた。あれは

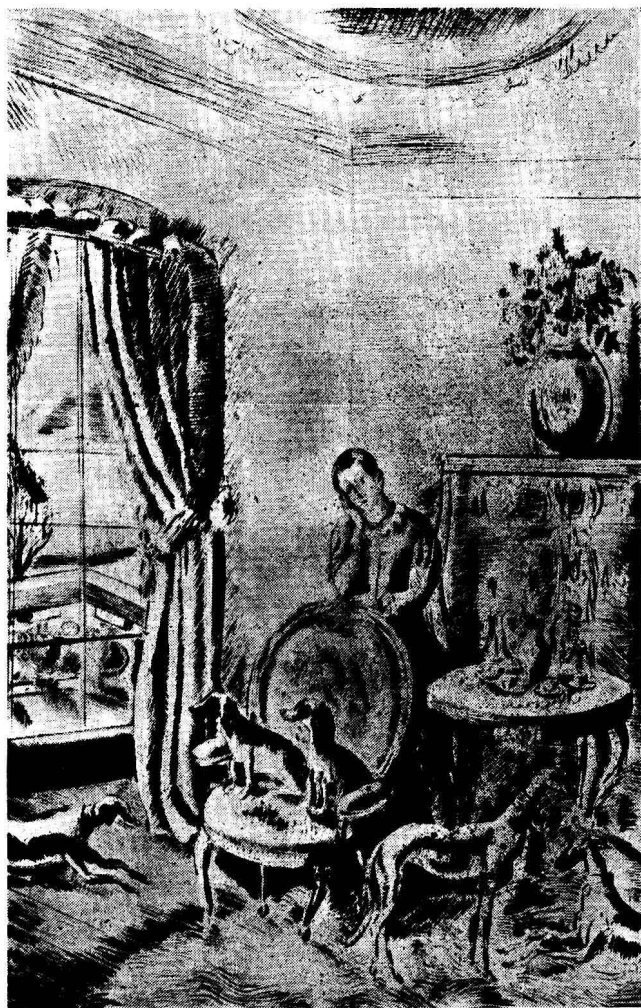
なんという死だったろう——二月のあいだ、しかもわめきどおしで、その叫び声は分農場にまで聞こえるほどだった。

あの、さしも長大で古びた館も、この死を住まわせるにはあまりに狭すぎ、翼棟を建て増さなければならぬかに思われた。侍従のからだは肥大する一方だったし、そのうえ四六時ちゆう、部屋から部屋へ運ばれることを欲したからだ。そしてその日がまだ終わらぬうちに、もうひととおりどの部屋にも寝かせられたとなると、彼は恐ろしい怒りを爆発させるのだった。すると、召使、侍女、それに犬たち、いつも彼が身のまわりに侍らせていた者たちを従えた行列が、階段をのぼり、家令を先達、いまは亡き侍従の母の臨終の部屋へと向かった。その部屋は、二十三年まえ彼女がことを去ったときのままに保たれ、ふだんはだれも足を踏み入れることを許されないところだった。そこへいま、暴徒の一団が闖入したのだ。カーテンがひきあけられ、夏の午後のあらあらしい光が、恐れ驚く調度品のいちいちをねめまわし、あばき出された鏡のなかでぎこちなく反転した。人々の振舞もこれと同じだった。好奇心のあまり手をどこに触れているのかうわのそらの小間使。じろじろとあたりを見回す若輩の給仕。そして、うろうろと歩き回って、幸いにいま入ることのできたこの開かずの間について聞かされてきた噂

話を、ひとつ残らず思い出そうと努めていた年かさの召使たち。

しかし、とりわけ犬たちは、ものみなが微くさいにおいを放つ部屋にいることに、異常な刺激を感じらしかつた。長身ではっそりしたロシア産のグレーハウンドどもは、安楽椅子の後ろをせかせかと走り回り、踊るように肢を伸ばし身をゆすって部屋を横切り、細い前肢を白金色の窓枠にかけて紋章の犬さながらに立ち上がり、尖った顔を緊張させ、額を後ろにひいて、みぎひだりと中庭をうかがっていた。小柄な、手袋を思わせる黄色のダックスフントらは、何もことなしと言うばかりの顔つきで、窓際に置かれた幅広の絹張椅子にすわりこみ、ふぎげんな様子の赤毛のポインターは、金色の脚のついた卓子の角に背をこすりつけ、その彩色された卓板の上で、セーヴル陶器の茶碗がこまかく震えていた。

たしかに、これらうつけ心に情眼をむさぼっていた物たちにとっては、恐ろしい一刻だった。だれかのあわただしい手が不器用にあげてみる本から、ばらかの花びらがよろけ落ちて、踏みじられた。ちつぽけな脆い品物が潰まれ、すぐこわされて、あわててまたもとに戻されたり、損傷をうけたいろいろな物がカーテンの後ろに隠されたり、それどころか暖炉の格子の金色の金網の後ろに投げこまれさえた。ときどき何かが落ちた。絨毯の上



にこもった音をたてて落ち、堅い寄せ木張りの床に冴えたひびきをたてて落ちた。そここでものが碎けた。鋭い音をたてて割れ、あるいはほとんど音もなくずれた。すっきり甘やかされていた調度の類は、落とされるとひとたまりもないのだった。

だれかふと思いついて尋ねたとする、この騒ぎの原因は何か、何がこわごわ守られてきたこの部屋いっぽうに破壊を呼び入れたのか、——答えはひとつしかなかったろう——つまり、死だったのだ。

ウルスゴーの侍従、クリストフ・デトレウ・ブリッゲの死だった。彼は暗青色の侍従服から大きくはみ出し、床のまんなかに横たわったまま、動かなかった。むくんで異様な形相になり、もうだれにもそれとは見分けられない顔のなかに、両眼は戸を立てたように塞がっていた。——そこに起こっていることを、彼は見ていなかった。

人々は、はじめ彼をベッドに寝かそうとしたのだが、彼はそれに逆らったのだ。病気がつのりはじめたあの当初の夜々このかた、彼はベッドを憎んでいた。それに、階上のこのベッドは小さすぎることもわかった。そうなる絨毯の上に寝かすよりほかに手はなかった。下へはどうしても降りようとしなかったのだから。

そんなわけで、彼はそこに横たわっていた。死んだのかとも思われた。しだいに暗くなりはじめると、犬たち

は一匹一匹扉の隙間から抜け出していった。ただ毛の堅い、ふきげんな顔つきの一匹だけが、主人の傍にうずくまり、太い毛むくじやらの前肢の一方を、クリストフ・デトレウの大きな灰色の掌の上にのせていた。召使たちも、もうおかたは部屋を出て、白壁の廊下に立っていた。その方が部屋のなかり明るかった。だが、まだ室内にとどまっていた連中は、まんなかに横たわったまましだいに黒ずんでゆく大きなかたまりをとぎときぬすみ見ては、もういい加減で腐れ物を掩う大きな衣服にすぎなくなってくれたら、と願うのだった。

しかし、まだ残っているものがあつた。それは声だった。七週間まえにはまだだれひとり聞いたこともなかった声——なぜといえば、それは侍従の声ではなかったからだ。声の主はクリストフ・デトレウではなかった。主はクリストフ・デトレウの死だったのだ。

クリストフ・デトレウの死は、もう幾日も幾日もまえからウルスゴーに住みつき、だれかれかまわず話しかけ、要求しているのだった。運ばれることを要求し、青い部屋を要求し、小客間を要求し、広間を要求した。犬どもを要求し、人々に突え、話せ、遊べ、静かにしろと要求し、何もかもいっしょくたに要求した。友人に会いたい、女たちや死んだ者たちに会いたいと要求し、自分も死にたいと要求した、——むやみやたらに要求した。要求し、

そして喚いた。

夜が来て、疲れ切った召使のうち、不寝番でない者たちが眠ろうとすると、きまつてクリストフ・デトレウの死が喚きたてた。叫び、呻き、吠えた。その声はながながと絶え間なくつづき、はじめこそいっしょに吠えていた犬たちも、ついには黙りこみ、寝そべる勇氣もなくして、長い細い肢をふるわせて立ちすくんだまま、おびえるのだった。そして、ひろびろと銀色に輝くデンマークの夏の夜々をつらぬいてその死が叫ぶのを聞くと、村の人々は嵐に襲われたときのようににはね起き、衣服をつけ、ものも言わずランプのまわりにすわりこんで、叫び声がしずまるのを待った。分娩まぢかな女たちは、いちばん奥まった部屋の、しかもいちばん厚い仕切りのある寝所に寝かされた。それでも叫び声は聞こえた。まるでおのれの胎内の叫びのように聞こえた。すると彼女らは自分もいっしょに起きていたいと訴え、ゆるやかな白衣をまとって現われると、表情をなくした顔つきで人々のわきに腰をおろした。ちようどそのころ産気づいた牝牛たちは、助けようもなくからだを閉ざしたままだった。ある牝牛など、どうしても仔が出てこず、とうとう死んだ胎児もろとも内臓までそっくりぬき取られた。だれもが仕事の手はずをまちがえ、干草のとりこみを忘れた。日中は夜のくるのを恐れ、夜は夜で幾晩となく不眠がつづき、

あるいはふいに脅かされて起き上がったたりするために、人々はすっかり疲れはて、何ひとつ考えをまとめることができなくなっていたのだ。日曜日、人々は白い平和な教会に集まると、もうウルスゴーに旦那様は要りませぬと祈った、——この旦那様は恐ろしい主人だったのだ。

そしてみなが心に思い祈ったことを、牧師までがあられもなく譚教壇から口走った。牧師も夜々を奪われて、神の意がわからなくなっていたのだ。教会の鐘も同じことを言っていた。恐るべき強敵が現われて、一晚じゆうわめき通し、鐘がその鑄鉄のすべてをあげて鳴り出したところで、どうすることもできなかった。まったくだれの口から出ることも同じだった。若者たちのなかには、館に侵入してこやし熊手でご主人様をうち殺した夢をみた者まで現われた。性根尽きて極度に興奮していた人々は、みな若者の夢の話に聞き入り、この男はそんなことができるほど大人になっていたのかと、思わずその方を見つめる始末だった。あたり一帯の人々は、ほんの二、三週間まえまでは侍従を愛し、気の毒に思っていたことも忘れて、だれもが同じ気持になり、寄るとさわるとその話をした。しかし、話し合ったところでどうなるものでもなかった。クリストフ・デトレウの死はウルスゴーに住みついて、あわてなかった。死は十週間のつもりでやって来て、ちようどそれだけとどまった。そのあいだ、こ

の死はかつてクリストフ・デ・レウ・ブリッゲがそうであつたより以上に、ここの主^なだつた。のちのちまで暴君と恐れられ言い伝えられる、王さながらだつた。

それは、一介の水腫^{すいしゅ}病患者の死ではなかつた。侍従がその一生のあいだ持ちつづけ、おのれの血肉ではぐくんだけのことはある、悪意にみちた王侯の死だつた。彼自身がそのやすらかな日々に使ひ果たしえなかつた、誇りや、意志や、支配力の残余のすべてが、その死の上に乗り移り、その死がいまこそウルスゴーに居すわつて、それを蕩^{とうじん}尽したのだつた。

これとは違つた死を死ぬべきだ、と彼に要求する者がいたとしたら、侍従ブリッゲはどんな顔をしてその人を見つめたことだろう。彼は、実に彼らしい重い死を死んだのだつた。

僕がこの眼で見た人、また噂に聞いた人など、いろいろほかの人たちのことを思い起こしても、——みな同じことなのだ。だれもがそれぞれに自分の死を持っていた。甲冑^{かこう}のなか深く、捕虜^{とりう}を抱きこむように死を持ちつづけていた男たち。高齢になつて小さく凋^{しほ}んだ身を、やがて、舞台を思わせる途方もなく大きなベッドに横たえて、家族全員、召使たち、犬たちにまで看取^みられながら、ひっそりと、しかし女主人らしい威厳をもつて、みまかつた

女たち。いや、子どもたちでさえ、まだほんの幼い子どもたちでさえ、どこにでもある子どもの死を死んだのではなかつた。彼らとて思いを凝らし、彼らがすであつたところのものは、彼らがいずれは成り出でるはずであつたところのものを、死んでいったのだ。

そして、女たちが身ごもつて立つとき、それは彼女らになんという哀^{かな}しい美しさを与えていたことか。ほつそりとした両の手が思はず触れていたその大きな胎^{はた}のなかには、ふたつの果実がはらまれていた——胎児と、死とが。彼女らのさえざえとした面輪^{おもて}に浮かんだ、あのこまやかな、滋味あふれるばかりのほえみは、ときとして、そこにこのふたつのものが育っている、こころひそかに思うゆえのものではなかつたか？

僕は恐怖に逆らつてみた。一晩じゆう、起きて書きつづけた。僕はいま、ウルスゴーの野を遠く歩いたあとのように疲れている。それにしても、ああしたすべてはもはやなく、あの古い長い館には見も知らぬ人々が住んでいるのだとは、なかなか考えられない。破風^{やぶき}屋根の裏の白い部屋には、いまだ女たちが眠っているのかも知れない。晩方から朝にかけての、重い湿つた眠りに落ちていくのかも知れない。

そしてここに、知る人もなく、持ちものもなく、トラ